

インフラメンテナンス 国民会議近畿本部フォーラム

インフラ管理者と民間企業・技術のマッチングを目的とする「インフラメンテナンス国民会議近畿本部フォーラム2019」がこのほど、大阪市内で開催され、2日間に延べ5千人以上が訪れた。橋梁通信は、注目される技術を連載で紹介する。



談笑する(左から)西川、玉田、坂野の各氏

冒頭のセレモニーで、策研究会の霜上民生・理事兼関西支部長が開会を宣言。来賓あいさつなど

に続き、同本部の情報ワーキング長、坂野昌弘・関西大学教授が最近の取り組みを発表した。

会場には、舞鶴高専(京都府)の玉田和也教授が指導したブースなど70団体が出展。西川和廣・土木研究所理事長らが講演した。坂野教授は橋梁通信

の取材に対し、「全国の道路橋70万超のうち50万橋以上は市町村管理であり、維持管理の主役は市町村。継続的な維持管理業務は安定した地元の雇用を生み、地域の活性化にもつながる」と指摘。その上で「曲がりなりに

も近接目視点検が一巡し、これからは対策段階に進む。ニーズは無制限である。ニーズとシーズのマッチングだけでなく、ニーズ同士やシーズ同士の連携も進めて、お互いにWinWinの関係になるとよい」と語った。インフラ最先端技術を紹介する展示ゾーンでは、多くの出展があった。

川田グループなど 新技術共同開発2件

足元が整地されていない吊足場上でも、データ取得が可能な「HandM

apper」(注1)を

使って工事現場を計測、その画像・点群データをサーバーに保存し、3次元バーチャルデータを作成する。

m、橋面積約2300㎡)で、5月から試験運用を開始。380地点の画像データを約10時間で取得し、2日後には3次元バーチャルデータ



アクティオが扱う新機種

アクティオ「従来機では 難しい作業を可能に」



田中部長

アクティオ(東京都中央区、小沼直人社長)は屋外ブースで、数ある同社のアイテムのうち、特にメンテナンスに有効な新機種を実演展示した。試乗で人気が高かった

のは、最大作業床高54mのフィンランド・ブロント社製「スカイリフトS56XR」。国内車では不可能だった高さを実現した高所作業車だ。ピソ社製の橋梁点検用ゴンドラ車「GC-240」なども展示。桁下100mまでの高橋脚にアプローチを可能にした機種だ。また、冬季の路面乾燥融雪、融水を効率よく進められる「マグニス」は同社が改良した商品だ。当日、同社のブースを訪れた来場者は屋外ブースで最も多い約600人。同社関西支店の田中顕吾営業専門部長は「従来機では難しい作業を可能にする新商品を展示した。お客様に実感していただき、手こたえを感じた。今後の営業に生かしたい」と話した。

現場管理者は最新の設計情報確認できる
保全工事現場